

Title	日本先史地理学序説：縄文土器文化の時代の地形変化
Sub Title	The introduction of prehistoric geography of Japan
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.1(163)- 20(182)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本先史地理学序説

— 縄文土器文化の時代の地形変化 —

江 坂 輝 彌

は し が き

日本の先史時代遺跡・遺物に対する地理学的研究は、分布圏や交易圏の問題などで、既にかなり古い頃から多くの諸先学の論考が発表されている。

しかし地理学の立場から日本の先史時代の諸遺跡、その出土遺物について考察をすすめられ、先史地理学という地理学の一分科を提唱されたのは小牧実繁博士が最初であるといわれている。⁽¹⁾

また近年は藤岡謙二郎氏などがこの方面に寄与する諸論考を発表されている。⁽²⁾ 筆者もまた交易圏と文化圏のかさなり、⁽³⁾ 縄文土器文化各期における集落選地の特性、⁽⁴⁾ 縄文土器文化各期の貝塚の分布より見た海岸線の変化の問題などいくつか先史地理学的な論考を発表してきたのであった。

筆者は今後機会を得て、日本先史時代各期における自然環境を復原し、その変化について、今日の成果で可能な範囲を究明したいと思っている。

本稿では自然地理学的な地形変化の問題などについて、問題点を提起して今後の究明方法などについて論及したい。

本 論

——日本の先史時代の地形変化の問題——

日本の先史時代と一言で記しても、近年の研究では岩宿、権現山、不二山よりさらに逆上る前期旧石器時代の石器と考えられる石器が栃木県星野、大分県早水台などから発見され、わが日本列島に人類が生活を開始してから一〇万年を越える歴史があるらしいことがわかつてきた。

1. 旧石器時代における地形変化

この時代の地形変化の問題、火山活動によるローム層の堆積などについては、近年若手の第四紀研究グループが各地で各地の火山ととりくんで鋭意研究を進めている。

岩宿以前の問題はローム層の層序学的研究と、今後の石灰岩地域の岩蔭遺跡の探索調査による出土獣骨などによるファウナ（動物相）の究明によつて、年代的位置づけも明確になり、当時の各地域の地形も次第に判明してくると思うのである。

岩宿以後の上部洪積世における後期旧石器文化は、南関東地方でいえば古富士火山による立川ローム層という最上層のローム層の堆積時代である。北海道大学の湊正雄教授によると立川⁽⁶⁾ローム堆積の初頭頃に海面が一〇〇ないしは一三〇メートル低下したトッタベツⅡ氷期（ヴェルム亜氷期Ⅱにほぼ該当）があつたと考えられ、この時代は日本海の中央部が大きな湖水として残り、日本列島は東アジア大陸の東縁をなし、陸続で大陸の一部をなしていたと想定される。そして縄文土器文化早期初頭の直前頃、トッタベツⅢ氷期（ヴェルム亜氷期Ⅲにほぼ該当）がありこの時も海面が三〇メートル前後低下したと想定している。

日本の旧石器時代文化の本格的な研究は昭和二四年相沢忠洋氏の岩宿遺跡の発見が端緒となり発展したもので、岩宿文化以降の遺跡は北は北海道から南は九州まで日本各地で発見され、研究もかなりの進展を見せているが、旧石器文化の研究に興味をもつ若い研究者の居ない地方は遺跡の発見が遅れ、ほとんど未開拓の状況にある地方も、かなり各地区に所在している。

以上のような状況にあり、後期旧石器時代におけるわが日本列島の地形、自然環境の復原も将来に譲り、ここでは旧石器文化終末頃以降の地形変化と自然環境の変遷について記述をすすめてみたい。

2. 縄文土器文化早期初頭の地形

筆者は湊教授のトツタベツⅢ氷期の海面低下は湊教授の想定される 130m よりさらに低下していたのではないかと考える。即ちトツタベツⅡ氷期が 100m 以上と考えられたと同様、100メートルに近い線まで低下していたもの推察される。

それは縄文土器文化早期中葉の黄島式の押捺土器を出土した愛媛県かみろけな上浮穴郡美川村みかわ上黒岩岩蔭遺跡かみくろいわの第四層や、早期後半の土器を出土した北海道網走市おまがり大曲洞窟でオオヤマネコなど東北アジア原産の豹ひょうぐらいの大きさの大猫の骨格が数頭分発見された事実などから考えて、このオオヤマネコはトツタベツⅢ氷期の頃、大陸と陸続きであった頃、シベリヤから北海道へ。朝鮮半島から西北九州を経て四国地方へとそれぞれ渡来したものの子孫がこの頃まで生きのびていたものではないか。トツタベツⅡ氷期の頃渡来したものであれば、今後もつと古い時期にも、そして広い範囲の遺跡からも発見が可能のように思われるし、この決定は今後の研究成果に俟ちたい。

しかし彫刻刀、細石刃などの製作技術はこの最後の陸続きの時代に東北アジアから北海道を経て東日本に拡るルートと、朝鮮半島経由で西日本へ拡るルートなどがあつたと考えられ、海面低下は大陸と陸続きになる程度の低下が考えられるわけ

である。またこの問題に関しては北海道の日高山系のみでなく、トツタベツⅢ氷期の東アジア全域の山岳地域の氷河地形、周氷河地形などの探索究明が必要であることはここに記すまでもない。

次に問題になるのがわが日本列島における土器文化の起源の問題である。石器、骨角器、木製品などのほかに、新しく煮沸用具として土器をつくるという技術が、世界の各地で沖積世初頭に各々自生したものであろうか、土器の発明ということは、今日の世界の原子力の発見発明にも匹敵する重大な発明であり、地球上の人類の進化発展に伴い各地で偶発的に発明し得るものとは到底考えられぬ現象である。

しかし地球上において、土器の発明は一地区の一人類によつてなされたものではないらしい。また今日まで常識的には土器発生の起源はほぼ一万年前とされてきたが、粘土を火にかけて焼くと石のように硬質のものがつくられるということは、これより遙かに古い時代の人々が気付いていたらしい。チェッコスロバキアのモラヴィア地方のヴェストニツエ遺跡 (Vestonice) ではソルトレアン文化の文化層から素焼のビーナス像や獣類土製品が多数発掘されており、ベルギーではマグダレニアン文化の遺跡から土器片が発見されたという。このように後期旧石器時代に偶発的に発生した素焼の粘土製品はその地区にある時期のみに存在したもので、後続すると共にその技術が広い地域に拡がりをみせるというような事実はなかつたものであろうか。この点はなお各地域の精査がなされなければ、今日の成果ではいずれとも決定できない。

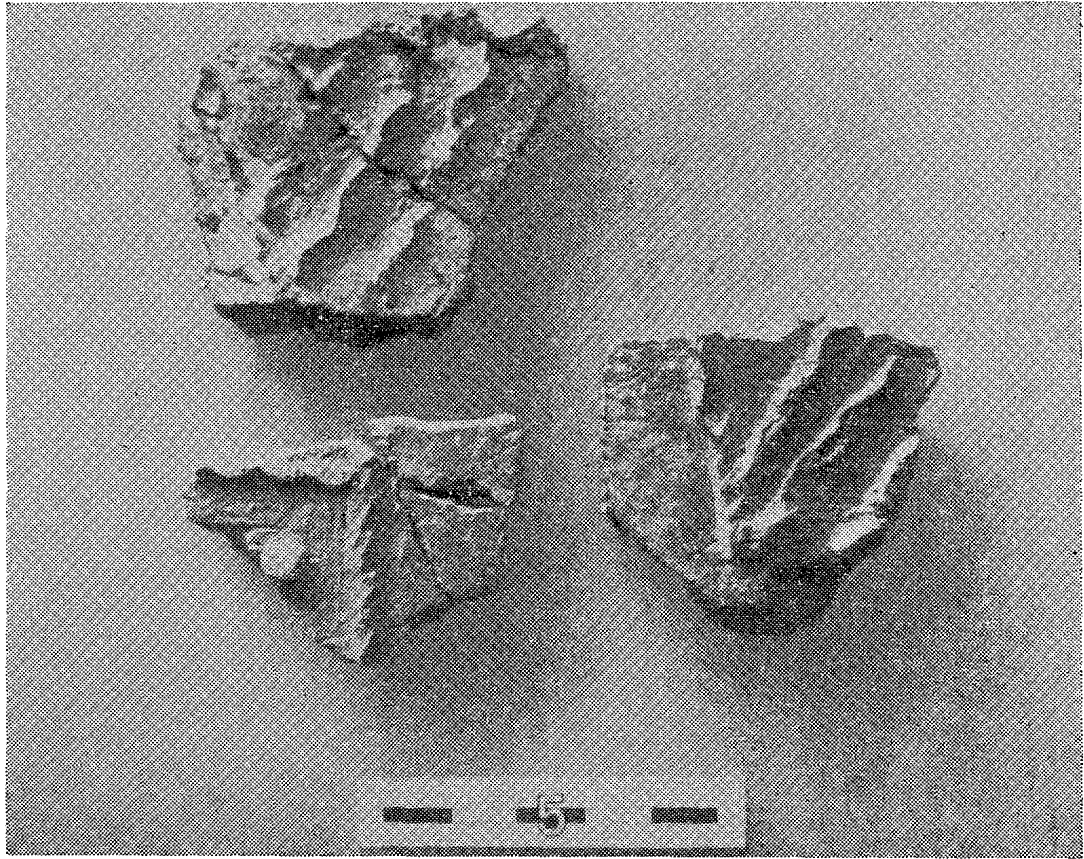
わが日本列島では山形県一ノ沢洞窟⁽⁸⁾、長野県荷取洞窟⁽⁸⁾、同石小屋洞窟⁽⁸⁾、同柳又遺跡⁽⁸⁾、愛媛県上黒岩岩蔭、長崎県福井洞窟などで発掘された細隆起線文土器の年代は、上黒岩と福井で細隆起線文土器と同一層位出土の木炭片によつて C₁₄による年代測定を行ったところ、上黒岩は (B. P. 12165 ± 600 I-947) 福井は (B. P. 12400 ± 35 Gak. — 949) 兼二圃 (B. P. 12700 ± 500 Gak. — 950) 兼三圃。とつう数値が算定された。C₁₄の年代測定は誤算が多く信用するに足らぬものとまつたく否定的な立場をとる考古学者も数多くの研究者の中に何人かあるが、まつたく否定する論者は科学的な研

究が理解できないことに起因しているのではなからうか。

世界各地で発見の最古の土器に今から一万年を逆上るといふものが今日まったく発見されていないのに、わが日本のみ一万二万年を逆上る古い時代に土器が存在するということはどういふことであらうか。反対論者は現時限の研究成果の基礎に立つてこんな馬鹿げた事実は信用し得ないという。極めて否科学的な論拠に主因があるのである。自然科学の生み出した事実は多少の誤算はあつても厳然たる事実で、人間の憶測などはるかに凌駕したものであると信ずる。日本における最近の先史考古学の躍進は目覚ましいものがあり、その精細な編年細分研究は大陸他地域の追随をゆるさぬものである。従つてわが日本で発見の細隆起線文土器に対比されるものが周辺大陸の何処かで発見され、この土器文化が大陸から一つまたはそれ以上の経路で、わが国へ渡来したことが立証される日がやがて来るとみなすべきではなからうか。既に中国東北部（旧満州方面）では細隆起線文土器の系統を引くものではないかと思われるものが発見されているが、発見年代が古いものであり、如何なる時期のものかなど明確にされていない。

東アジア大陸各地における始源土器文化の追及と、これらの各地域における編年的研究の今後の成果が、日本最古の土器文化の発生の起源を解く鍵となるであろう。また非常に確率の少いことであるが、今後の研究成果によつて世界最古の土器文化の一つが日本列島内で発生したということもあり得るのである。

日本における最古の土器文化は石鏃の発生以前の文化であつたらしい。即ち弓があらわれる以前の文化で狩猟用具としては専ら槍と投げ槍が使われていたと考えられる。しかしこの時代に西北九州の福井洞窟以外では有舌尖頭器がさかんにつくられ、時代が下降するに従つて小形化している。これは投げ槍から弓への進歩を思わしめるものがある。この時期の後半に周辺地域から弓の渡来があつたものであらうか。次の無文薄手土器の時期には長さ一センチ内外の小形の二等辺三角形石鏃があらわれる。



第一図 愛媛県上黒岩岩蔭遺跡 第9層
出土の日本最古の細隆起線文土器片

上黒岩岩蔭遺跡では細隆起線文土器の文化層から緑泥片岩の扁平な長さ三センチ大の川原石に細線を彫りこんで表現した女性像が発掘されているが、石または骨に細線を彫りこんだ獣類を描写したものの、或は図案的な文様など、旧大陸では旧石器時代の終末期、中石器時代に普遍的なものであり、上黒岩の線刻女性像もこれと一応の関連性のあるものと推察される。東アジアでは中国広西省桂林付近の洞窟遺跡からホアビニアン形の礫器と共に出土した線刻文様礫が斐文中博士によつて報告されたものが一例知られている。¹⁰⁾

以上のような事実からして、始源土器文化が周辺大陸とまったく没交渉の文化ではなく、トッタベツⅢ氷期の絶頂期に近い時代のことであり、日本列島は日本海を抱くように大陸と東北部と西南部でまだ地続きであつたと考えられる。

福井洞窟でも上黒岩岩蔭でも細隆起線文土器の文化層からは獣骨などの発見が少いので、この当時のファウナを充分理解することができない。上黒岩では大型のニツ

ポンザル下顎の発見などが注目される程度である。しかしこの程度の大型の下顎は現生のニッポンザルの雄にも稀に見られる程度の大きさであるとのことであり、今日知られる資料からは当時の気候が現在とどの程度の差があつたかなど皆目わからない状況である。

またこの時代の日本の海岸地形を復原することは、今日までの研究成果をもつてしては至難のことであるが、現在水深六〇メートル未満の大陸棚はおそらく陸地の一部をなしていたと想像され、瀬戸内海は四国と中国の間に介在する内陸盆地であつたと推察される。

細隆起線文土器につぐ時代の土器として近年注目をあつめているのは爪形文土器である。この土器は古く諏訪湖底の曾根遺跡から石鏃などと共に発見され、湖上住居跡の存在など、二〇世紀初頭の学界を一時にぎあわせた遺跡である。その後八幡一郎教授によつて本遺跡発見の小形剝片石器類が古いタイプのものであることが指適され、昭和年一年三月刊の雑誌『ミネルヴァ』誌上に『信州諏訪湖底「曾根」の石器時代遺跡』と題する論考を發表されているが、この時代にはまだ早期初頭の土器文化の編年は未開拓の状態にあり、漠然と古かるべきものであることを注意されたにとどまつた。

曾根遺跡の所在地に通称地名が示すように湖岸からローム層の浅瀬が半島上に湖心に向つて突き出した場所で、湖水面が三米以上低下すると半島上に突出した陸地となり、早期初頭に爪形文土器文化の人々がこの地に集落を営んだ時代は、この地が諏訪湖岸へ突き出した半島状の低台地の突端部であつたと考えられる。そしてそれから間もなく八ヶ岳の泥流が諏訪湖の流れ口を堰止めたことが原因となるものか、この点まだ充分究明されていないようであるが、諏訪湖の水位の上昇によつて曾根の地は湖底に水没したものと想像される。曾根に爪形文土器文化人が集落を営んでから後、水没するまでの期間は、僅かな年代であつたということは、曾根遺跡からはかなりの獣骨が出土することによつて立証されたと見てよいのではなからうか、水没が早かつたために骨が酸化腐蝕して消滅するのを防げたのではなからうか。

曾根遺跡に直径二メートルないし三メートル、長さ三メートルぐらいの鋼管を二個以上使用して、鋼管の中の水を排水して湖底遺跡の綿密な発掘調査の実施が可能であれば、約一万年前における諏訪湖の水位変化の問題も容易に究明できるのではなからうか。また湖底遺跡の調査で当時のファウナはある程度明らかに行き得るであろうし、攪乱を受けない推積層が発見されれば、花粉分析によつて当時のフロラも判明し、気候環境も察知できると思われる。シジミ採集のじよれんで攪乱を受けているのは湖底面のきわめて表面に近い部分だけで、遺物包含層はそれよりさらに深い部分まで存在するような地域があるのではなからうか。

爪形文土器も細隆起線文土器同様に、現在奥羽南半から九州地方までその分布圏が判明している。そしてこの二つの土器文化が現在までの調査で、本州、四国を含めた地域と九州地方では伴存の石器文化が異なるらしいという興味深い事実が指摘されることである。長崎県北松浦郡吉井町福井洞窟では細隆起線文土器(第三層に多い) 爪形文土器(第二層に多い)の文化層からも黒曜石製の細石刃と細石刃核が主として出土し、上黒岩岩蔭に見られたような有舌尖頭器(第9層、細隆起線文土器に伴出) 二等辺三角形小形石鏃(第6層 無文土器に伴出)などはまったく認められなかつた。また鹿児島県出水市上場遺跡においても爪形文土器と共に黒曜石製細石刃と細石刃核が発掘されている。

以上の事実から本州方面では石鏃発生の段階に入っている爪形文土器文化の時代まで、少くとも西九州地方では弓矢があらわれず、細石刃による投げ槍を主要狩猟具として使用していたことになるのであろうか。九州地方には土器文化発生直前の細石器文化に直箭鏃(Trapeze)を思わせる石器があり、これがもし鏃として使用されていたのであれば、福井洞窟の細隆起線文土器、爪形文土器の時期にもこの伝統を引く鏃が存在したものと考えられるが、福井洞窟の第三層、第二層、上場遺跡の爪形文土器文化層からもトラピースを思わせる石器は発見されていない。

この事実が文化の伝播系路を握る重要な鍵であるように思われる。

次に早期の土器文化で伝播系路が問題になるのは南関東地方にのみ分布圏をもつ井草式土器である。井草↓夏島↓稲荷台の縄文と撚糸文の全面に施文された砲弾形尖底深鉢土器の各形式は時代が下降するに従つて三浦半島を中心とする南関東地方から周辺地域へ次第に拡散する傾向がみられる。この系統の文化も最初は石鏃を保有しない文化で、小形二等辺三角形の石鏃があらわれるのは稲荷台式土器文化の終末頃から、次の無文土器の多くなる花輪台2式、平坂式などと呼ばれている土器文化の頃である。横須賀市夏島貝塚の夏島式土器を出土の貝層中の木炭とマガキによつてミシガン大学における C₁₄ の測定結果は、(B. P. 9240 ± 500 M.—770. 771) (B. P. 9450 ± 400 M.—769) と発表されている。この系統の土器文化は長さ一〇センチ未満の細長い川原石の先端の一面のみを打ち欠いて製作するか、また先端のみを一面から磨製して刃を付し、刃を鋭くするため、最後の仕上げで片面も僅かに磨いた局部磨製の石器など特異な礫器が伴存するがこのような特異な礫器のみを多数出土するものは日本列島の他地域の早期の文化には見られない。

そこで後藤守一博士は井草式土器が三浦半島方面から東京都の一部というよう限られた地域に分布圏を持つ特異な文化であり、井草、稲荷台式土器文化が判明した昭和一四年当時、筆者らが想定した本系統土器文化の南アジア起源説に荷担されて、小笠原諸島から伊豆七島方面を経て、南関東地方南端部へ伝播したものではないかと考えられた。そして東京都教育委員会で昭和三一年から昭和三二年にわたつて行つた伊豆七島の先史遺跡の探索調査の際には、伊豆七島で井草式土器の出土遺跡を発見しようと思念に努力されたが、二カ年にわたる博士の存命中の調査では遂に井草式、夏島式土器などを出土する遺跡の発見はできなかつた。博士はこの二カ年の調査の成果だけで伊豆七島には井草式、夏島式の遺跡は皆無であるとし、伝播系路は他に求むるか、南関東で自生したかもしれないという考え方にかわられたようである。

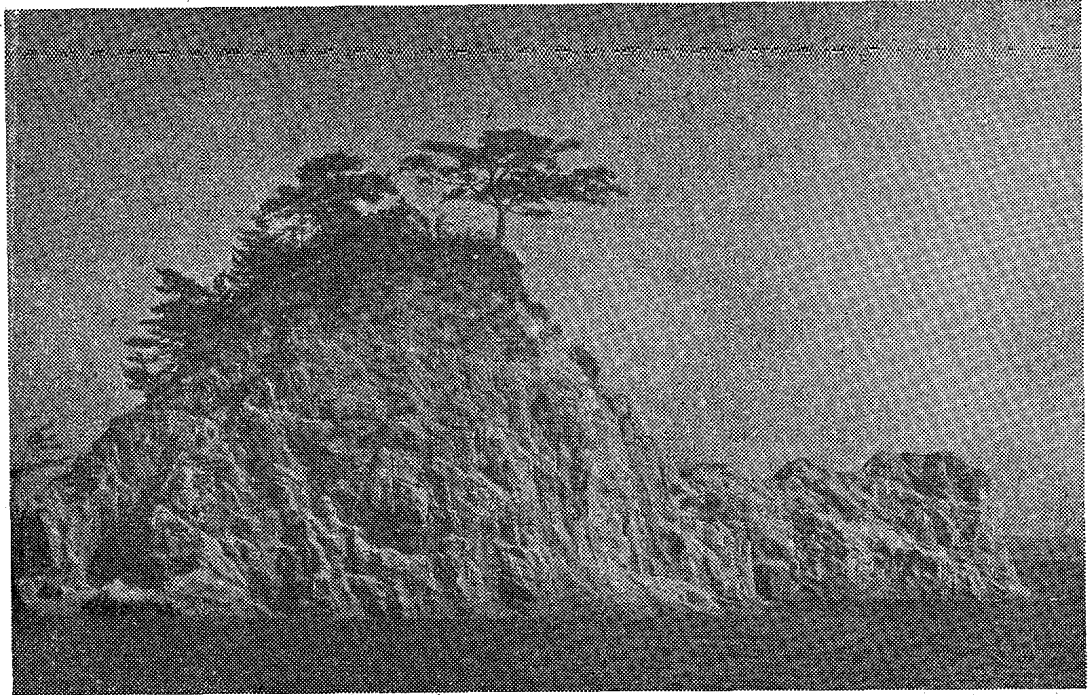
伊豆七島はすべてが火山島であり、弥生文化の遺跡でも熔岩下に深く埋没しているような遺跡が多い。後藤博士が一九六〇年逝去された後も、伊豆七島では島の開発に伴い、熔岩下の遺跡が各所で発見されている。今日までに知られた選跡

は縄文土器文化早期後半以降のものであるが、今後さらに地下深い場所の開発が進むと、早期前半の選跡が発見されるかもしれない。また早期初頭は海面低下の絶頂期から海面上昇期へ向つた最初の頃であり、現在より海面が数十メートル低かつたことはほぼ間違いない。かく考えると早期前半の井草式土器文化の遺跡は伊豆諸島の諸島周縁の海底に所在することも考えられるわけである。

従つて井草式土器文化の伝播系路の問題は当時の海面水位と、海岸線の状況を調査することが先づ第一に究明すべき仕事であろう。まだまだこの頃まで日本各地の火山の火山活動も非常に活潑であり、当時の集落が熔岩下に埋没したり、火山灰層下に深く埋没するようなことも非常に多かつたと推察される。このようなことから考えて、まだにわかには小笠原、伊豆諸島経路による文化の伝播をまつたく否定しすることは困難なように思われる。またマイクロネシアの調査も未だ充分とはいえないようである。

また新潟県東蒲原郡上川村室谷洞窟⁽¹¹⁾の第六層から第一三層出土の縄文、撚糸文の施文されたすみまる方形の平底の鉢形土器は、今日までの研究調査の成果では他に類品の出土例が乏しく、本形式土器の文化圏、広地域における他形式土器との層位関係はまつたく不明であり、第一三層まで小形二等辺三角形石鏃が伴出しており、石鏃を伴存しない細隆起線文土器文化、井草・夏島式土器文化より年代が下降するものではないかとも思われるが、室谷洞窟下層発見の土器文化については本形式土器の他選跡より発見の類例増加を待つて改めて問題を提起すべきものであらう。

次に前記してきたものより時代が下降するが、早期中葉に関東地方西部から西日本一帯に拡がりをみせる廻転捺文土器文化は、ちょうどこの頃に海面の上昇が現在の〇メートル水位付近まで上昇し、瀬戸内海の海域もほぼ現在の状況に近い状態にまで達しようとしていた状況が、瀬戸内海の諸島嶼に残されたこの時期の貝塚遺跡からも推察され、先史地理学上はなほだ興味深い時期である。



第二図 香川県豊島礼田崎突端ダブカス貝塚

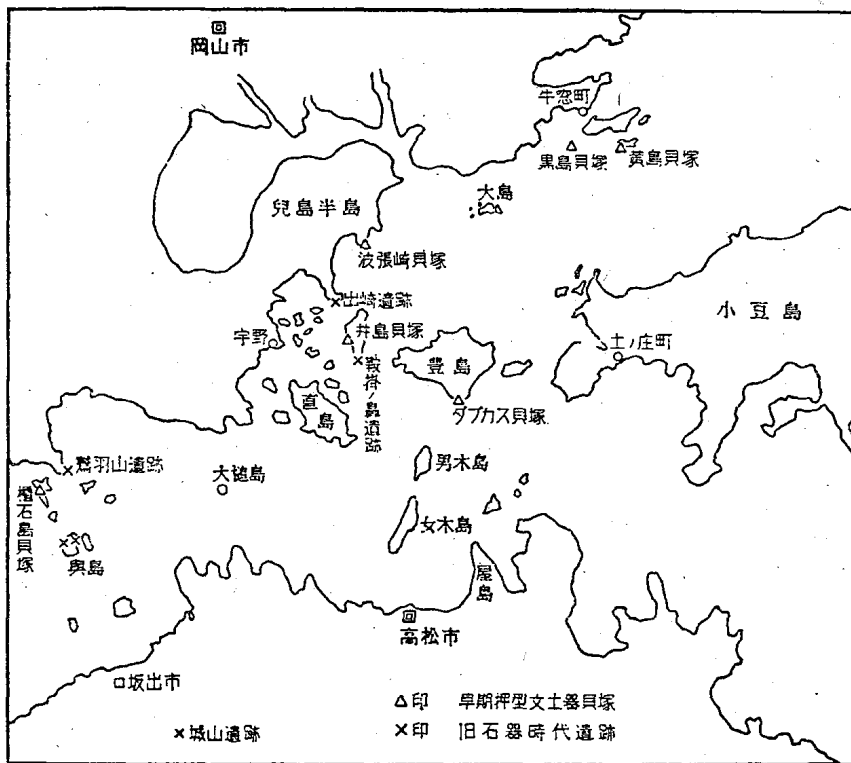
瀬戸内海地域で岡山県児島半島と香川県高松市を結ぶ付近が最も海浸の遅れた地域であるらしい。香川県小豆郡豊島は小豆島の西部にある比較的大きな島であり、この南端部の礼田崎は男木島を南々西に見て、真南は約一〇キロの海上を経て屋島台地に対してしている。この礼田崎の先端部が豊島に地続きであるが、松の茂つた小島のような観を呈し、ここを通称ダブカスの鼻と呼んでいる。この松の下にほとんど巾一センチ前後の小粒なヤマトシジミのみからなる厚さ二〇センチ内外の貝層が見られる。この貝層中からは山形ないしは楕円の押捺文土器片が発見される。ここは押捺文土器の時代の貝塚遺跡である。現在の地形から見るとこのような海面に突出した岬の先端に小粒のシジミのみからなる貝塚の存在など考えられない状況にある。この豊島の西北部にある井島の西海岸大浦にも小粒なヤマトシジミを主とする小貝塚があり、児島半島の東児町波張崎の先端部、児島市下津井沖の櫃石島などにも同様な貝塚が存在する。また東北部では岡山県邑久郡牛窓町沖の黒島にシジミを主とし、これにハイガイ、マガキなどが混じる押捺文土器を出土する小貝塚があり、黒島の東方、前島の南側に黄島があるが、この小島嶼の西南端部にも押捺文土器を出す貝塚がある。こ

殻がかなり混じて堆積している。

この状況は黄島と小豆島の間が最初多少海水が流入する河口のような状況でヤマトシジミが繁殖していたが、泥底の潟湖のような淡水地域に、海水の流入度が次第に強まり、徐々にヤマトシジミの棲息に好適であつた地区が、汽水性の泥底を好むハイガイ、泥底の岩石、浮遊木片などに付着して棲息するマガキなどの貝類が棲息に適する地区に地形が変りつつあつたことを示しているものである。即ち海面水位が次第に上昇していることを示す好資料である。

このように小豆島の付近から児島市と丸亀市の間にある塩飽諸島の東部付近までの間は早期中葉の頃まで中国と四国地方の一部の間が陸続きの場所があり、瀬戸内海の現在の水深の深い地区が潟湖のようになり、ここに海水が流入し始めていたものと推察される。

しかし燧灘の方面は既に内海となつていたものであろうか。香川県三豊郡仁尾町小蔦島貝塚はハマグリが過半数を占め、他にハイガイ、オキシジミなどの鹹水産の斧足類の貝殻が多く、ヤマトシジミは全体の一割にも満たない数であつた。従つて仁尾町付近の海岸はほぼ現海岸と類似した状況であつたかと思われる。ただ海灣に變つて日浅く、海岸の海底は現在のように白砂のみでなく、砂泥底で、ハマグリなどの繁殖



第三図 小豆島付近におけるヤマトシジミの多い押擦文土器貝塚の分布図

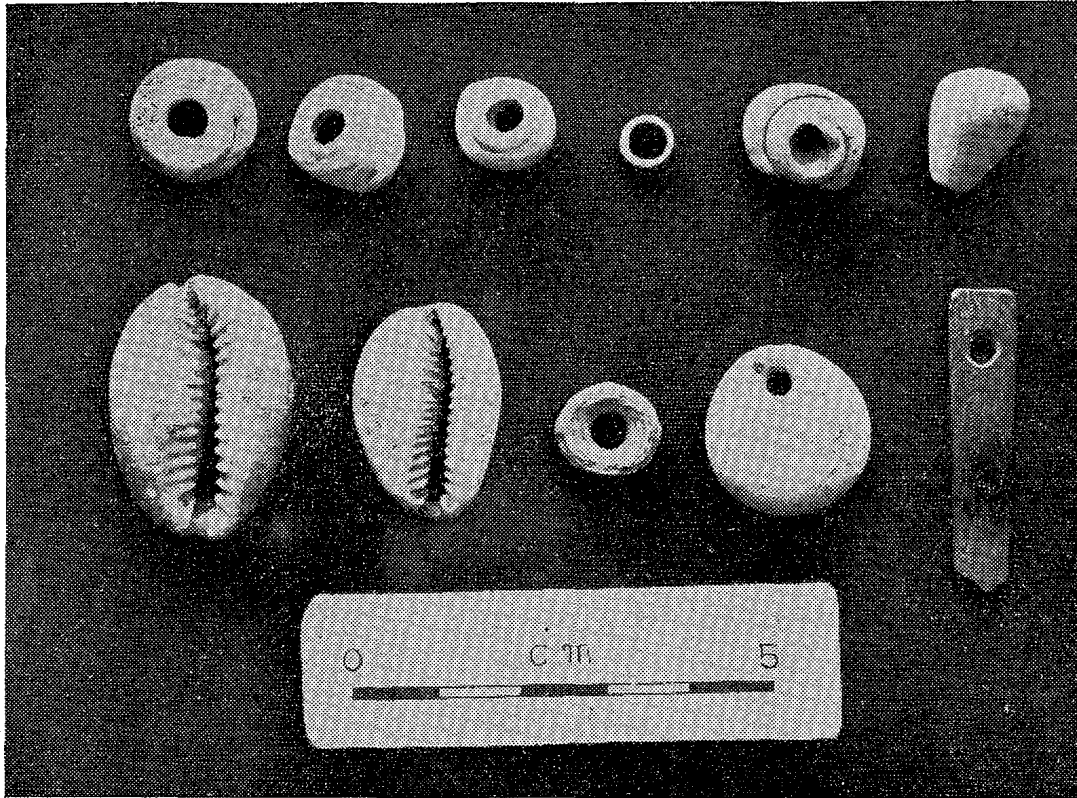
に好適な状況にあつたと考えられる。

瀬戸内海西部の広島県と愛媛県今治以西の島嶼の押捺文土器遺跡は未発見で、この地帯の当時の海岸線の状況は今日までの研究成果では皆目不明である。

別府湾の北西部、大分県速見郡日出町小深江の早水台遺跡は賀川光夫氏らが発掘調査した押捺文土器の時代の大集落址であるが、この集落所在の台上にはまつたく貝塚らしき遺跡がない。別府湾に直面する台地であり、現在の海岸は岩礁であるが、小さな巻貝類が多数棲息している。縄文土器文化早期中葉も現在とはほぼ同一の海岸であつたとすれば、スガイ、イシダタミ、イボニシなど小巻貝類からなる小貝塚が存在してもさしつかえないように思われる。当時の海岸地形が現代とかなり異なるか、当時この付近の海岸には貝類が棲息できないような状況があつたものかとも考えられるが、早水台遺跡において貝塚が発見されないという間接的な条件では、当時のこの付近の海岸地形を論ずる資料とはならない。

なお岡山県牛窓町黄島貝塚の貝殻でミシガン大学で C_{14} の測定を行ったところ (B. P. 8400 ± 350 M-237) という数値が算出され、最近黄島式より若干古形式と考えられている細久保式の押捺文土器や人骨を出土した長野県南佐久郡北相木村枋原岩蔭遺跡の木炭を学習院大学で C_{14} の測定を行ったところ (B. P. 8650 ± 180 Gak-1056) という数値が出た。従つて押捺文土器文化はほぼ八千年前の文化とみてさしつかえなからう。

土佐湾に流れこむ仁淀川の上流、愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩、岩蔭の第四層の黄島式の押捺文土器出土の文化層の埋葬人骨の周辺からはイモガイの殻頂部を半球形に磨いて、中央に孔を穿つて垂飾品としたもの。タカラ貝の開口部を板状に磨いた垂飾品などがかなり出土しているが、これら暖海産の貝類は四国山脈の石槌山麓までいずこから運んだものであろうか。当時瀬戸内海にはまだイモガイ、タカラガイは棲息していなかつたであろうし、土佐湾方面が豊後水道方面から招来したものでなからうかと推察される。(第四図参照)



第四図 愛媛県上黒岩岩蔭遺跡第4層出土のイモ貝、タカラ貝、ツノ貝製垂飾品

また上黒岩岩蔭遺跡の第四層からの出土遺物や、長野県栃原岩蔭遺跡の出土遺物などを見ると前記した貝製品のほか、骨角器にも精巧な作品があり、かなり高度の文化を持つていたことが知られる。ところが瀬戸内海地域の黄島、黒島、礼田崎、井島大浦、小蔦島などの諸貝塚では土器片のほか石鏃などの剝片石器類が若干出土する程度で、自然遺物も貝殻のほか、獣魚骨などはほとんど発見されない。従つて以上の諸島嶼に所在の遺跡はきわめて貧しい特殊な小集落遺跡であつたと思われる。

3. 四国地方の縄文土器文化の集落立地

また上黒岩岩蔭遺跡の発見と前後して、当時愛媛県立久万高等学校に勤務されていた松本重太郎氏が上浮穴郡久万町付近の遺跡探索されたところ、久万町周辺の台上各所に縄文土器文化各期の遺跡が発見され、また四万十川上流の檮原川流域の山岳地域にも多数の縄文土器文化の遺跡が存在するらしいことが判明してきた。四国地方は従来縄文土器文化の遺跡はきわめて少いところとして注目され、なぜ少いのであろうかと疑問を持たれ、各種の推測がなされてきたのである。し

かし今回の上黒岩岩蔭遺跡の近傍の調査によつて、はからずもこの謎を解くことができた。即ち四国地方は東日本に比較し、気候温暖で平野部および平野に近い標高一〇〇ないし二〇〇メートルぐらいの丘陵地域まで常緑樹林帯である。四〇〇メートル以上の山岳地域に入ると檜、櫟などの多い闊葉樹林帯となる。落葉の多い闊葉樹林帯では樹木の下草も各種のものが生育する。兎、鹿、猪などの棲息地としてはこのような闊葉樹林帯が好適地であるらしい。狩猟による獣肉は彼等の食生活にかなり重要な部分を占めている。従つて彼等は兎、鹿、猪などの重要狩猟対象物の少い平野部で生活を営むことは非常に困難なことであり、四国地方の場合はこれらの獣類が多数棲息する標高四〇〇メートル以上のところに必然的に集落を営むものが多かつたわけである。根本原因は植物相の相違にあるのである。これらのことも先史地理学的に今後各地域について再検討の必要があると考へる。

4. 縄文土器文化の時代の日本海岸

日本海岸の海面変化は太平洋岸とはかなりの相違がある。富山県下付近以西で平野部で縄文早期末の貝殻条痕文土器の遺跡が発見されると、低湿地深く埋没されている場合が多い。そしてその遺跡における遺物包含層は標高〇メートル以下現日本海の海面より低いことが多いのである。島根県八束郡鹿島町鵜灘うなだ貝塚もこの一例で、宍道湖と日本海を結ぶ、運河の底面と両岸の水面下に貝層を露出している。鳥取、島根付近では前期、中期、後期初頭の遺跡も海岸近くの平野部のものは、標高〇メートル以下に遺物包含層がある場合が多い。

出雲大社神官の大国一雄氏の談によると、出雲大社の拝殿が火災で焼失後、拝殿の下に防火貯水槽を作成後、新拝殿が建築されたが、その防火貯水槽発掘の際の所見によれば、上層からは歴史時代の大社の祭器のかわらけが出土し、下にゆくに従つて平安朝より古いと思われる土師器に変わり、標高〇メートル付近で弥生文化前期の土器と縄文文化晩期末の土器が発掘されたとのことである。大国一雄氏はさらにその下層から晩期前半あるいは後期の土器の出土を期待したが防火貯

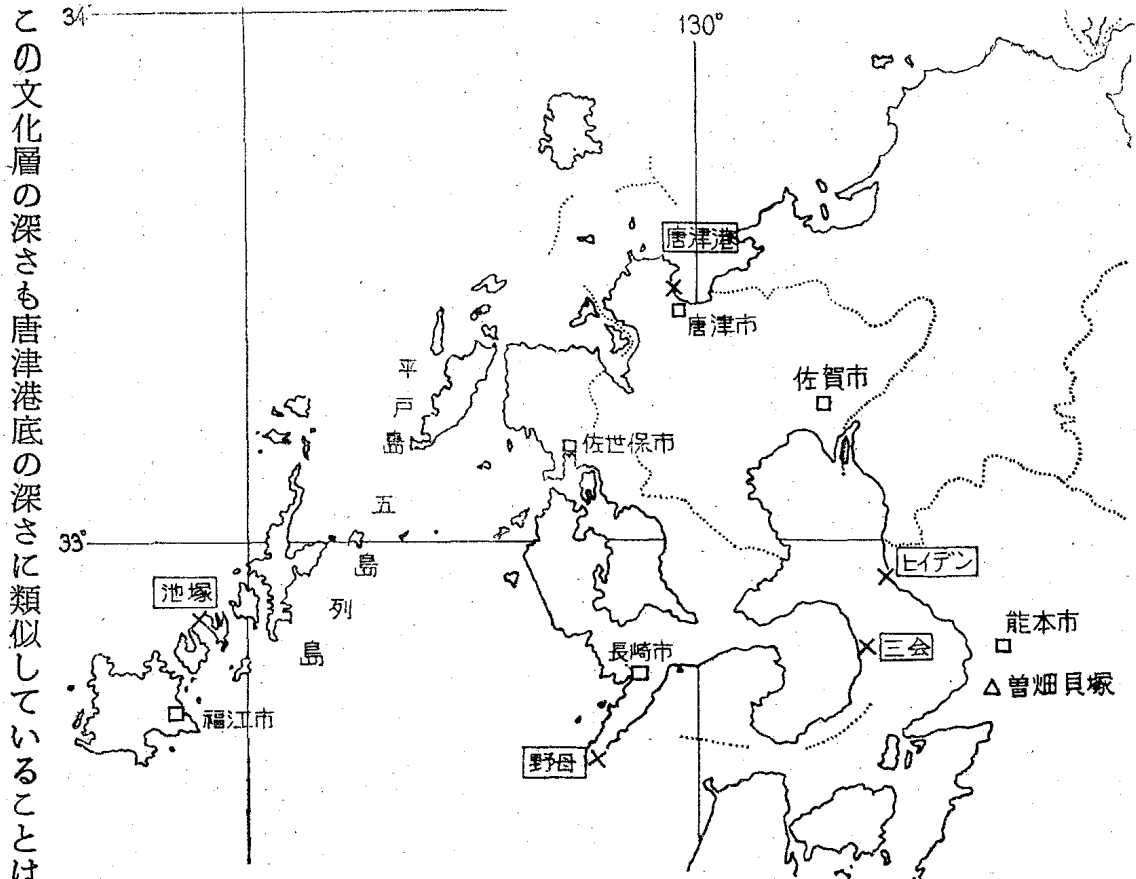
水槽の工事はそこで終了してしまつたので残念ながらその下層の状況は知ることができなかつたとのことである。

鳥取県境港市のある夜見ヶ浜砂丘の先端部付近の中海と美保湾を結ぶ海峡付近の西部、西灘の海底と、境港市外江の四〇メートルほど沖合の北灘では水深一メートルないし一、三メートル付近から、前者は前、中、後、晩期、弥生中、後期の遺物から須恵器まで出土し、後期の磨消縄文ある完形浅鉢なども発見されている。後者の遺跡からは後期前半の土器が出土している。また対岸の島根県八束郡美保関町（旧森山村）崎ガ鼻海蝕洞窟では、後期の包含層が海面上高さ三メートル付近にあり、その下層の前期末の大歳山式土器（おとしやま）の文化層は海面より略一メートルの高さにあり、その下層の北白川3式、2式などの文化層は〇メートルぐらいから下であつた。また崎ガ鼻洞窟の西方の池ノ尻遺跡は海面下四〇センチ内外のところ
前に前期の北白川2式類似の土器を出土する文化層がある。

日本海岸の方は海面の上昇以外に、地盤の沈下現象も加つているのであるか。これは今後の重要研究課題である。

5. 西九州地方 東支那海岸、縄文土器文化時代の地形変化

西九州地方も日本海岸西部と類似した傾向が見られる。とくに熊本、長崎県の有明海沿岸、長崎県野母半島、佐賀県唐津付近、五島列島などに西九州地方における縄文土器文化前期初頭頃と考えられる曾畑式土器を出土する海底遺跡がある。この曾畑式土器は朝鮮半島方面の石器時代文化と関連深い文化で、わが国では九州脊稜山脈の西側、西九州地方から種子、屋久両島までが分布圏で、本州では下関近傍に若干見られる程度で、縄文土器文化の中心文化圏へはあまり影響のなかつた文化であるが、韓国と西九州地方を結ぶ、環東支那海岸文化としては注目すべき文化であり、韓国の東南海岸の石器時代遺跡の探索調査が進むと、この地域にも西北九州地方同様に、現海岸線より若干沖合の水深一メートル内外の場所
所に海底遺跡が発見される可能性がある。もしも韓国東南海岸にも同様な遺跡の存在が立証されたならば、当時の朝鮮海峡付近の海面は現在より数メートル低下していたことになり、韓国に発展した櫛目系土器文化の西北九州への島ずたいの



第五図 西北九州地方の曾畑式土器文化の海底遺跡分布図

伝播が、今日以上に容易なことであつたと推察される。

なおまだ十分に究明されていないが、西北九州の曾畑式土器文化の遺跡発見の石器などのうちに、わが西北九州産の岩石でなく、朝鮮半島産の岩石を使用しているものがあるのではないかと考えている。この事実も明確な例を把握できると当時の半島との交易圏、文化交流の問題などもかなり鮮明になつてくると思うのである。

唐津港海底遺跡は石炭積み出し港の唐津棧橋工事の際、水深二メートルぐらいの海底から、曾畑式土器と共に、同じく前期のものと考えられる他の一形式の土器が発見され、貝殻獣骨などもあり、海底に貝塚遺跡の存在の疑もあり、発掘調査が可能であれば曾畑式土器と他の未命名一形式の土器の層位関係も明らかになし得たのではないかとと思われる。

また長崎県西彼杵郡野母崎町野母海岸の干潮時に砂浜となる地区の海底面下、地下一、五メートルの深さに多数の獣魚骨、埋葬人骨などと共に曾畑式土器の文化層がある。

この文化層の深さも唐津港底の深さに類似していることは興味深い。この事実は当時の海面が現在より三メートル以上低

下していたことを物語るものではなからうか。

五島列島^{なる}奈留島（長崎県南松浦郡奈留町）西部の大串湾口西側の池塚の海浜からも汀線付近で曾畑式土器が発見されている。発見者の橋行一氏によると Beachrock 内に含まれている⁽¹³⁾。橋氏によると Beachrock は珊瑚沼に伴うことが多いものであり。当時の九州西岸は現在より一層温暖な気候下にあつたものと思われることであるが、曾畑式土器を使用した人々がこの地に居住したのは、Beachrock 生成の年代よりも以前と考えられ、従つて橋氏のいう当時の気候環境が今より一層温暖であつたと考えられると記された年代は縄文土器文化前期初頭の曾畑式土器の使用された時代ではなく、それ以降のある時代の気候環境を指適されたとみるべきである。満潮線と干潮線の間⁽¹⁴⁾に介在する奈留島西岸の曾畑式土器遺跡も、この地に集落が営まれた当時は、海面から数メートル高い台地上に所在したものと考えられ、当時の五島列島の海岸地形は現在とかなり相違し、現在水深五メートル内外のところに汀線があつたのではないかと想像される。また調査研究が充分ゆきとどかないが、日本海岸と東支那海岸の海面変化の問題は太平洋岸とかなり相違する点があり、今後の精密な研究調査に期待される点大きい。

6. その他の問題点

縄文土器文化の時代から今日までの地貌の変化の問題のみをとりあげても、まだまだ記すことは非常に多い。

琵琶湖北部の葛籠尾崎沖合の水深五〇メートル前後のところから早期の山形押捺文土器、中期、後期のほぼ完形土器をはじめ、弥生文化の土器まで多数の土器が発見されているが、このように各期の完形土器が琵琶湖としては最も水深の深い地域に多数埋没していることは注目すべきことで、池すべり説、断層による陥没説など、集落が営まれて後の各種の地形変動説も考えられるが、水底遺跡を水底に入つて調査するような計画がなされないため、まだ実証する段階には立ち至っていない⁽¹⁴⁾。

また十和田火山の火山活動による地形変動が縄文土器文化後、晩期の遺跡に影響した事実、馬淵川に堰止湖の一時的出現、淡水湖岸貝塚の堆積、またこれらの事実と十和田伝説との結びつきなどについては、かつて簡単に「日本の考古学Ⅱ」に記したことがあつた。

また青森県下に多い、泥炭層遺跡の成因の研究、これら各泥炭層遺跡における花粉分析などによる当時の植物相（フロラ）の究明も今後に残された重要研究課題である。

また日本の各地域における古い砂丘の生成年代を究明する端緒は砂丘下底部における縄文土器文化各期の遺跡の発見などによる場合が多い。砂丘、砂嘴の発達による地形変化とその年代も、その砂丘、砂嘴に所在の先史時代遺跡の発見究明と深い関連性があるわけである。

このように先史地理学上の地形変化という問題一つをとりあげても、非常に多くの研究課題があり、まだいずれもほとんど未開拓の状況にある。

結 語

日本の先史時代の地理学的景観の復原、この研究はきわめて複雑多岐であり、各方面からの研究分野があり、いづれも未開拓で、数人の地理学者によつてようやく開拓の道が開かれたにすぎない。

ここにとりあげた地形（地貌）の変化という問題のみにしほつても研究課題は非常に多く、あるものは今後の地形変化を示唆するような資料ともなる。

先史地理学は以上に記したように非常に多くの研究分野をもっており、先史考古学、地理学などから分科して一つの学問的体系をなすものであると思うのである。

（昭和四二年八月二〇日）

註

- (1) 小牧実繁 先史地理学研究 昭和一二年
- (2) 藤岡謙二郎 地理と古代文化 昭和二年
- ” 先史地域及び都市域の研究 昭和三〇年
- (3) 江坂輝弥 考古学ノート2 先史時代Ⅱ縄文文化99頁 昭和三二年
- (4) 前掲書90頁
- (5) 江坂輝弥 海岸線の進退から見た日本の新石器時代 科学朝日 一四卷三号 昭和二九年
- (6) 湊正雄 日本列島 改訂増補二版 85~87頁 井尻正二 岩波新書 昭和四一年
- (7) B. Klima Dolni Vestonice Praha 1963
- (8) 山形県一ノ沢岩蔭 山形県東置賜郡高島町蛭沢一ノ沢岩蔭 長野県荷取洞窟 長野県上水内郡戸隠村(旧柵村)追通荷取洞窟 長野県石小屋洞窟 長野県上高井郡東村仁礼山 石小屋洞窟。 長野県柳又遺跡 長野県西筑摩郡開田村西野柳又日本考古学協会編 日本の洞穴遺跡 平凡社 洞穴調査委員会編 昭和四二年 樋口昇一 木曾柳又遺跡第一次調査について 信州ローム 七 昭和三六年
- (9) 芹沢長介 縄文土器の起源 34頁2段目29行目~34行目 自然一七卷一七号 昭和三七年 鎌木義昌 縄文式土器・縄文文化の起源について 3周辺文化について 90頁~92頁 岡山理科大学紀要2号 昭和四一年一二月
- (10) 斐文中 広西の洞穴の中石器文化 中国地質学会誌一四卷 三号 昭和一〇年
- (11) 中村孝三郎 室谷洞窟 長岡市立科学博物館研究調査報告 小片保 六 昭和三九年
- (12) 八幡一郎 早水台 大分県文化財報告 第三輯 賀川光夫 早水台 大分県文化財調査報告 第一二輯 八幅一郎 早水台 大分県文化財調査報告 第一二輯 賀川光夫 早水台 昭和四〇年
- (13) 橋行一 五島のBeachrockについて(その一) 長崎大学教養部紀要 自然科学 第四卷 昭和三九年
- (14) 小江慶雄 琵琶湖底先史土器序説 京都学而堂書店刊 昭和二五年 小江慶雄 琵琶湖湖底遺跡再考 京都学芸大学学報 一三 昭和三三年
- (15) 江坂輝弥 縄文時代の生活の舞台 河出書房「日本の考古学Ⅱ」 昭和四〇年 | 自然環境の変化について |